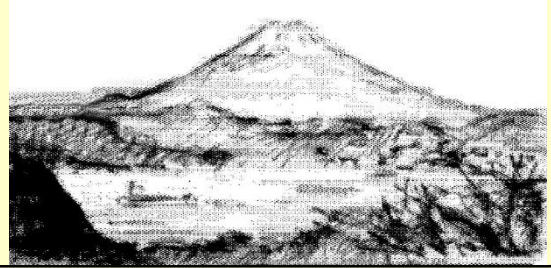


かけはし

昭島市立富士見丘小学校
校長だより No. 3

令和2年6月29日
稲垣 達也



本紙「かけはし」は、学校便りとは別に、校長便りとして、適宜、校長の所感を綴るものです。

今年は7月が「ふれあい月間」です 追い詰められていく子供たち…

今、子供たちに伝えたいこと **「弱音を吐いていいんだよ！」**

目の前で子供がころんだら…、あなたはどのようにしますか？

先日のこと。保育園の子供たちがお散歩に出かけている列に出会いました。ほほえましいなと思って見ていると、一人の2、3歳ぐらいの子供が転んでしまいました。

気付いた保育士さんが、近くまで歩み寄って「大丈夫？」と声を掛けていました。その子は先生の方をじっと見て、一人で立ち上がりました。そして先生が手と膝の汚れを軽く払い、頭を触ってあげると、その子は笑顔になって、何事もなかったかのように歩き出しました。

とても素敵な光景を目にすることができ、温かな気持ちになりました。

子供への接し方の違い

その時、「ボクは、人から助けてもらえる価値がある人間なんだ。」と実感したと思います。これが自己有用感です。

「人っていいな。困ったときは、助けてくれるんだ。」と、人を信頼する心が育つ出来事だったと思います。その子は、温かな励ましや眼差しから力をもらって、乗り越える喜びや誇らしさも体験できたのではないのでしょうか。

逆に、「ちょっと転んだくらいで…」、「たいして痛くもないだろうに…」と、一人で立ち上がらせることで、自立する力を身に付けさせたいという考え方もあるでしょう。また、一人で乗り越えさせることが大切な場面も、もちろんあると思います。

子供の自立とは…

しかし、自立とは、『一人で何もかもすることではなく、自分の力で人生を切り開いていく力』だとも言われています。

そのためには、上手に人を頼っていくことも大切です。子供たちは経験が少なく、気持ちや行動をコントロールする力も十分ではないため、つらい気持ちや困ったということ、なかなか一人では解決できません。さらには、自分の弱音を人に伝えられない結果、望ましくない行動につながってしまう危険性すらあるのです。

弱音を吐ける雰囲気

自分がつらい気持ちになっていることや、自分が困っていることに自分自身で気付く力を育てたいと思います。そして、つらかったり、困ったりしたら、「つらい」、「困っている」と、いつでも弱音を言える雰囲気を作りたいと思います。

弱音を吐けることは、真の勇気だと思います。